

# 農作業よりつらい光合成のための除雪

## 一、農業者になった日

平成二十七年十二月十日。私は晴れて農業者となりました。五十七歳と半年。根拠法令は、以前農業委員会事務局で説明を受けた「農地法」でなく、「農業経営基盤強化促進法」という少し難しい法律でした。内容は農用地利用集積計画による所有権移転というもので、移転を受ける者というのが私のことでした。

自衛官としていつも人事発令を受け仕事をしていた私にとっては、何とも味気のないものでした。どこかで「遊佐宏文、農業者に任命する。農用地所有を許可する。〇〇大臣」のようなことを期待していたのですが、なんとなく始まっちゃった…という印象でした。それでも自分のものとなった約八千五百平方メートルの農地に愛着を感じ、今日から農家だと気合をいれてハウス建設の測量を始めた時には、湿った雪が降りしきる、それが農業者第一目でした。

## 二、土壌改良の 有材心土破砕工法

この年の三月三日。私は十勝の帯広農業高校の実習ハウスを訪れていました。せっかく農家になるのだから、一年中農作業をしたいとかねてから考えており、支援センターの白澤さんに相談したところ、同校の実践例を研修させていただくことになりました。当日、実習ハウスでは無加温で生育したレタスやほうれん草が青々としてるところを見ることができ、大変驚

いたことを覚えています。その日の朝の外気温が零下十度を下回ったとの説明を受け、二度びっくりでした。十勝の黒ボク土に、牛たちが寝床に敷いていた木片であるパーク資材を混ぜ合わせて、土壌の比熱効果を高め蓄熱することで急激な温度上昇や低下を抑制し、かつ排水性を良くして作物の根張りや呼吸を促進する工法「ゆうざいしんば（有材心土破砕工法）」でした。九州勤務の際に合鴨農法に出会い、是非やってみたいと思い立った感覚と同じものが私の胸を「ドキュン」と貫きました。

よし。これをやろう!! 一年中農作業をやることに決定した瞬間でした。こうした経緯もあって、私のハウスでは、ハウス建設の前に「有材心破」を施工することにし、併せて温湯を循環させ地温を高めるためのパイプ埋設やハウスの周囲を発砲スチロールで囲って地温低下を防止する対策をとってからハウスを建てることにしました。

そして今まさに、雪原の中に立つ私の百メートルハウスの中では、レタス、ほうれん草、小松菜、ラディッシュ、白菜、カブのほかパクチーなどが育っています。この工法を指導してくださった元北大教授の相馬尠之先生が平成二十八年六月に急逝されたことは新人農業者にとりまして大打撃でした。これから様々の指導をいただこうと考えていた矢先であり、野菜たちが雪の中で青々と生育しているところを是非見ていただきたいかったです。ここに謹んで相馬先生のご冥福をお祈りする次第です。

## 三、光合成のための 除雪がつらい

こうして年間を通して野菜を栽培できるハウスを造ったものの、野菜たちに太陽光線を届けるための除雪が随分つらいことまでは予想していませんでした。

降雪でハウスを潰さないための除雪は、キャビン付きのトラクタのスノーブローアで難なくできるのですが、ハウス側面にへばり付いて残っている雪を取り除かなければ作物の光合成に支障が出てしまいます。冬の太陽光線が斜めに射しこむからです。夜明けまでに、少なくとも午前中の間には、約三十センチの厚みで残っている雪を百メートルにわたリ手作業で除雪するのは、花畔地区では若造で通っている私でも相当つらい仕事です。やはり「還暦おやじ」ですから、それなりに体のあちこちにガタは来ていますし、冬場だからと言って太る暇はありません。夏に雨が降ると農作業の外仕事は無くなりませんが、冬に雪が降ると農作業よりつらい外仕事が日常となります。しかし、自分で決めたことですから弱音を吐くわけにはいきません。でも、せえせえ、ハアハア。。。 (了)

(平成30年1月10日記)

